

北方洋学思想史—盛岡と東京—（4）

藤原 暹

前回までに、北方洋学思想の問題を安政年間まで辿って来るとともに、江戸—盛岡—箱館の情報ネットワークが形成されつつあった事を指摘した。

さて、南部盛岡藩では安政元年には藩校明義堂に洋医学が採用される事となり、その中心的人物として八角宗律が任じられるが守旧的漢医学派によって弾圧された。しかしこの弾圧をテコにして「日新堂」という洋学校が盛岡に設立され維新时期まで活動する事となる。これらについては、すでに「南部盛岡・洋学校日新堂」他の拙論¹⁾があり省略したい。

ここでは、維新から開化期にかけての北方洋学の問題を考えておきたい。

一. 維新时期の日新堂

日新堂と並んで藩学校明義堂が拡充され、「作人斎（後に作人館）」という文学教場と武術教場としての「止戈場」が設置された。これらはともに戊辰戦争における南部盛岡藩の敗北の結果、一時廃止のやむなきに至ったが、明治三年にはともに再興している。

ここでは、「日新堂」の状況について述べておきたい。というのは長岡高人著『日新堂物語』において「戊辰戦争当時には日新堂は盛岡藩の兵器弾薬の製造所となり。敗戦降伏による官軍の占領行政下において終に廃止処分になってしまった」とされ²⁾、この時点にその終末が告げられているからである。

明治3年10月作人館は盛岡県学校と名称を改め再出発したが、「和学、漢学、算学、医学」の四科の中で医学局は和漢の学習を見合わせて、洋学（英学）教育に力を入れる事となった。

岩手県立図書館に、『庚午歳 少助教 少得業生 日記』という史料がある。庚午歳とは明治3年であり、まさに県学校として作人館が再興した時期における医学局の状況を書き残したものである。

少助教	長嶺真来太 伊藤辨司 山崎謙蔵
三等出仕教官	八角又新 嶋立甫
大得業生兼小助教心得	大田代熊太郎
舎長被免本官	猪川富弥 名須川良平 小田仙弥
大得業生	矢羽々正舟 板垣太郎 那須小五郎
小得業生二等助手	三浦尚徳 穴吹道也 青木良平
小得業生兼舎長御用勤	小野昌一

.....

1) 『洋学1』 八坂書房 1993

2) 熊谷印刷出版 昭57

とある。この中で八角又新とは八角宗律・杏齋・高遠の別名である。日新堂の中心人物の再登場である。(5年3月廃官, 4月医術検査局長となるも11月廃官, 11年12月家督を次男の高英に譲る³⁾。高英は盛岡中学校の初代英語教師後述。)

三浦尚徳(自佑・恭園)は八角宗律と並ぶ日新堂の盟約者の一人である。

鳶立甫(文化4年-明治6年)は日本最初の本格的な化学書『舎密開宗』(天保8年刊)の翻訳者宇田川榕庵によって「(伊阿胃母・イオジューム) 鳶立甫ハジメテ之ヲ昆布焼灰中ニ得タリ。弘化三年丙午三月。立甫, 名ハ玄澄。南部盛岡ノ人, 舎密ヲ善クス」と紹介された日本における化学の部門における先駆的人物であった。また彼は江戸本所柳島町の「巴麻油焼炭所」でタールを抽出し, その副産物であったガスを居宅に引き点灯した人物でもあった。

彼については, 勝海舟も記述している。安政2年に蕃書調所翻訳御用のために江戸在住の蘭学者を調査したことがあった。それは58名に上っているが, その中に大島惣左衛門, 武田斐三郎, 大槻俊齋, などと共に島玄甫の名がある。⁴⁾ 文久3年の日新堂の設置時点には参加していない。元治元年には南部盛岡藩医として仕えている。以後明治初年まで盛岡と関係をもったものと考えられる。先掲の「日記」に,

十二月朔日晴(穴吹)道也
(小野)昌一

当局今日御開業ニ付
医聖依ト加刺得私御備物
有之候事

とある。「依ト加刺得私」とはヒポクラテスの事で, 江戸期以来, 蘭方医の中で信奉されてきたが, 特にその画像が尊重されて各地で発見されているのである。緒方富雄氏によつ日本における画像についての詳細な研究がなされているし, 「ヒポクラテスの漢字名について」は中野操氏の研究がある。(なお, 筆者には青森市で近年まで行われた新年行事に画像が掲げられきた調査の結果の報告がある。⁵⁾)

ヒポクラテスを学神として崇める記事は他にもみられる。

同月十八日
来ル廿日納会ニ付学神御祭事
有之候条正服用五ツ時出頭
拝礼可仕也
十二月廿日 (八角)又新
(三浦)尚徳

納会ニ付
学神拜終テ
酒肴拜謁

ところで, この医学局の仕事は1. 日常の医療活動を行う事。
2. 医師免状を発行する事。

3) 藤原暹 編『八角杏齋の研究』昭63

4) 『日本洋学編年史』錦正社 昭40

5) 『地域文化研究2』八戸高専地域文化研究センター 1993

3. 処刑に立ち会い医療を施す事。
4. その他。

であった。

1に関しては、種痘の実施を広く行っていた事である。「(明治四年)五月廿九、今夜種痘之新苗渡来」の記事があり、「六月朔日、十二児種痘済ム」とある。

その他では、例えば「十二月十八日及川洋造右ハ日新堂教育所治療ニ差向被申付」という記事や「(同日)原文司 小原良作 右ハ報恩寺教育所差向被申付」という記事があり、盛岡の各所(正伝寺にもあった)にあった教育所に派遣されての活動がみられた。明らかに医学局とは別に「日新堂教育所」という医療機関が存在していた訳で、日新堂は維新时期において本来の医療機関として存続していたのである。

この医療活動の中で注目されるのは盛岡における「熱病ノ悪性伝染」の事態であった。「辛未二月廿日 島少助教 八角少助教」の連名で県医学方に提出した治療に関する意見書は公衆衛生の問題提起の上からも注目されよう。

熱病ノ悪性伝染毒ニ転スルハ専ラ病室ノ大気熱毒ノ蒸気ニ穢サルニアリ

此悪穢ノ蒸気再び病者吸収シテ血中ニ混ジ弥瀦敗スキ熱ヲ醸シ終ニ悪性ノ熱病ト変スルモノナリ。如斯悪穢ノ熱蒸気病室ニ充滿シ尚此毒ヲ吸収スルニ由リ患者ハ危険ニ陥リ看待者及ビ医モ亦感染スルモノナリ 故ニ速ニ其毒ヲ驅除セスンハ非ス

凡新鮮ノ大気ハ天然ノ良薬ニシテ疾病ヲ治スル妙機唯此大気ニアリ医ハ唯是ヲ輔相タルノ業務タリ則左件ノ施術ヲ最モ緊要トス

其法大気通暢適宜ヲ得タル一室ニ移スコトモ企テ先ツ寢台ヲ造リ日々に衣服ト臥具ヲ改メ是ニ臥サシム可シ 然シテ寢台ノ下ニハコロリンソータ及コロリンカルキヲ皿ニ盛り或病院内ノ地上ニ撒布シカボレカスヲ患者ニ嗅シメ其薬性ノ蒸気満院ニ…セシムレハ腐敗性ノ悪穢ノ伝染毒ニ混シ大気ヲ清甦ニ成サシメ其毒ヲ消滅セルモノナリ是最大一術ニシテ内薬ハ夫レノ病勢ノ度ニ由テ方ヲ処スルモノナリ

這般ノ施術一周或二週間持久スルヲ予防法ノ規則トス

右ノ次第ニ御座候処日新堂当時熱病人凡四十人内悪性熱既ニ危険ニ陥者二十人法恩寺熱病人凡五十人内悪性熱既ニ危険ニ陥者九人有趣ニ御座候間不取敢右三十人ノ大患ノ分新鮮ノ通ヲ得ル場所ニ御引移前書規則之通御処置御座候仕度…

という対策意見を申し出ている。しかもこれは「貴賤ノ差別無之儀」を旨とするように述べている。明らかに不特定多数人の住居する都市の衛生予防の考えが出ているのである。

明治初期の啓蒙思想時代は衛生思想の普及(当時はまだ「衛生」という用語よりも江戸時代以来の「養生」という用語が一般的であった⁶⁾)が唱えられはじめる。例えば『七一雑誌二』の別禮(へいれい・ペレー・同志社病院の設立者)の「養生法—空気を通す事」などみられる。そこでは、

人間諸病の原因をたずねたるに、室中空気を通すことの不十分なるより来るもの実に多く…諸熱の原因となり…家屋の建築において空気を透通せんため猶一層の注意を加えしめたり。…⁷⁾

とある。上記の又新、立甫の提言もかかる思想の中に位置づけられよう。

2に関しては、(明治三年)極月十三日に工藤貞蔵以下37人に「免状被許」している。

6) 半沢洋子「衛生」『語誌』明治書院

7) 『明治文化全集 雑誌編』P. 398 昭3

これら37人は盛岡在住以外、花巻、(南部)郡山、見前、大迫等である。

3に関しては、「(明治三年)十二月廿七日」の事として「樸刑有之ニ付当願第八字(時)問罪所江御医師老人為相請可申旨権大属江達有之」という記事があり、廿六日の所に「樸刑有之ニ付立合療治申付候事但シホフマン并フィーラルトビン入為持差遣也」とある。

4に関しては、言うまでもないが「講訳内科新説(また癩狂論)講師八角少助教」という記事が示すように医学局における講義であった。

明治4年9月、盛岡県学校は盛岡洋学校へ転換し、和漢学を休業し洋学(主として英学)への改革を図り、文明開化への道を急ぐ事となり、慶応義塾出身の中原雅郎が大学南校の規則に従って英学教育を行ったと言われる。しかし、県学校時代にすでに英学講義は行なわれていたのである。次の史料は次節で述べる共慣義塾の開設時期に提出された英学教師の履歴書の一部である。⁸⁾

岩手県貫属士族 長沼熊太郎 申二十一歳

一. 明治二年己巳二月ヨリ九月マデ、岩手県学校ニ於テ、開成所文典書、レンター文典。ヲルコステー氏小究理書、イントロ究理書教授相成ル。

岩手県貫属士族 八角高英 申二十歳

一. 明治二年己巳二月ヨリ五月迄岩手県学校ニ於テ、クエッケンボス究理書教授相成ル。

八角高英は宗律・高遠の次男であり、岩手英学の先駆者の一人であり、やがて開学する盛岡中学校の初代英語教師となる。盛岡洋学校以前に岩手の英学はスタートしていたのである。(勿論、ここでは「英学」というものを原書講読を基礎にしたものと考えての事である。ペリー箱館入港以来、外国人の会話を聞き取り、筆録し記憶して、片言ながら会話をを行い商取引など行った者はいた。これらについては別に拙論⁹⁾があるが、この段階と一応分けて考えたい。)また提出された八角高英の履歴書には、「一. 慶応三年丁卯三月ヨリ同年六月迄、都合五ヶ月、横浜ニ於テ米国人バラー氏ヨリ第一・第二リードル卒業、」とある。バラー氏とは James Hamilton Ballagh (1832-1920) の事で、彼はアメリカ・オランダ改革派教会の宣教師であった。日本伝導を志して Margaret Kinner (マーガレット・キネア) と結婚して来日した。文久1年11月に神奈川に上陸し、慶応1年横浜で日本語教師矢野元隆に洗礼を受けた。これは日本で初めての洗礼式となった。明治5年横浜公会(横浜海岸教会)が設立され牧師となる。かたわら横浜で英語塾を開き、学生の教育に当たった。彼の弟が John Craig Ballagh (1842-1920) で明治5年に兄に招かれて来日。兄に代わって高島嘉右衛門創立の高島学校藍謝堂で英学を教える。高島学校が火災で明治6年に廃校になった後、ヘボン塾に移った。高島嘉右衛門は父高島嘉兵衛の代から南部盛岡藩に関係があった。高島父子については別稿を用意している。

さて、佐藤昌介や菊池武夫などはこの洋学校で学んだ後に大学南校に進学した。

いまや、ここに八角宗律たち南部・盛岡の蘭学者の終焉が訪れていたのである。

二. 「共慣義塾」について

明治開化期は洋学を教える学塾が東京を中心に乱立していた。その中で最も多くの生徒を集めたのは福沢諭吉の慶応義塾であった。南部・八戸の南部信順が学監、南部信民が校主をした

8) 『岩手近代教育史』

9) 「南部藩英学の濫觴」『統南部藩英学の濫觴』『岩手史学研究73, 74』

共慣義塾は学費も安価であった事もあって多くの生徒を集めていた。後に総理大臣になる原敬や犬養毅といった人物や科学者田中館愛橘もここで学んだ。

この学塾に関する研究史として長岡高人氏「岩手における洋学教育」や『岩手近代教育史』の関連論考¹⁰⁾がある。

ここでは、長岡高人氏の研究をも踏まえながら新事実にふれておきたい。

1) 福地源一郎の日新舎と共慣義塾

共慣義塾の設立を考える上で『明治五年開学願書』（東京府）があげられる。この二つの資料はほぼ同じ内容であるが、後者によれば、共慣義塾の位置は「第二大区小五区湯島天神下三組町新五番地福地源一郎ヨリ借地」の記述があることから、福地源一郎と何らかの関係があるようである。…

共慣義塾と福地源一郎との関係については、この学塾出身である犬養毅の『犬養木堂伝』¹¹⁾に詳しい。

共慣義塾は、もとは福地桜痴が創立したといふことだが、当時は八戸の南部家（盛岡南部の分家）が管理して居り、家扶が塾監であった。塾は賄料が安くて、従ってひどい粗食で閉口した。…

福地源一郎が明治初期に英学を教える学塾を開設したことについては、『福地桜痴』¹²⁾や『幕府衰亡論』（福地源一郎著 石塚裕道校注¹³⁾）にも記述がある福地がこの学塾を開設するに当たって影響を受けたのは旧幕府時代の友人である医学者松本良順であったという説の他、福沢諭吉から忠告を受けたという説がある。…松本（良順）は、オランダの貿易商ヒストルの援助で、早稲田に立派な病院を建てて、医者としてはなはだ有名であった。源一郎もこれを聞いて大いに奮発したか、湯島天神下の旧大名久松家の邸を手に入れて、そこに日新舎というイギリス語・フランス語を主とした洋学校を起こした。…

福地が湯島天神下に洋学校を設立したことは確かなことのようにである。そして、この学校には、後に自由民権運動で活躍する中江篤介（兆民）が入学してきた、という。

教頭として中江篤介（兆民）がいたが、源一郎は学校のことは殆ど中江に任せきりで吉原の方にばかり出掛けて行く。中江は、長崎で十分フランス語を学んできたので、日新舎には初め生徒として入ったのであるが、すぐ生徒から教頭とされた。…

この資料は福地源一郎側の資料によるものである。これによれば福地源一郎と中江兆民の両者によって「日新舎」が運営されていたということである。福地源一郎と中江兆民は箕作麟祥の塾で知り合ったということであるが、中江兆民の側からは、日新舎に所属し仏学を教授したという記述はない。次の資料は、中江がフランス留学から帰国後の明治7年8月に彼が「仏学塾」を設立する際に東京府知事・大久保一翁に提出されたものの中で「家塾位置」と「教師履歴」を抜粋したものである。

家塾開業願（抜粋）

一. 家塾位置

第三大区三小区中六番町四拾五番地
高知県貫属士族 中江篤助

10) 「東北の歴史と文化」『岩手史学研究70』 昭62

11) 『明治百年史叢書』

12) 吉川弘文館

13) 東洋文庫 平凡社

当明治七年八月 二十六年九月

一. 教師履歴

慶応元年碓陽ニ赴キ諸家ニ就キ学ブコト一年慶応二年江戸ニ遊ビ村上英俊ニ学ビ半年ノ後浪華ニ転遊シ明治三年東京ニ移リ箕作麟祥ニ受業シ二年ニシテ大学南校教員ニ列シ明治四年十一月仏国ニ遊学シ在留二年六月ニシテ帰朝総テ学ブコト十年

但シ東西転遊ノ間及ビ時変ニ遭遇シ業ヲ廢セシ時間モ十年ノ中ニ包容ス。…

中江兆民の教師履歴によれば、福地の日新舎の名前は見当たらないが、『中江兆民全集別巻』の中江の年譜によると「1869（明治2）年に福地源一郎の塾日新社（舎）の塾頭となり、フランス学を教える」という記事もあり、どうやら中江が福地の「日新舎」で仏学を教授していたことは事実のようである。

しかし、中江は日新舎では物足りなかったようで、翌年の1870年には、神田南神保町に設立された箕作麟祥（実際は箕作秋坪が正しい）の私塾に入学、同年5月には大学南校の大得業生となっている。

一方、前述の『福地桜痴』では福地と同様に中江も吉原通いを始めたために塾がめっちゃくちゃになったとある。…

いずれにしても、1870（明治3）年になると日新舎には教授する人物がいなくなっていたようだ。

日新舎は長続きすることはなかった。

源一郎は学校を榊原某に譲って、身をひいたというが、榊原はなかなか経営の才があったか、南部信民という旧大名を校主にして、これを建て直し、名も共慣義塾と改めて、大いに繁昌させたという。…

福地が学校経営を断念したのが明治三年のことである。上の記述によれば福地が「榊原某」という人物に学校を譲り、その学校を南部信民を校主に建て直したということである。その一方で、福地の「日新舎」終焉については別の説がある。『福地桜痴集』（明治文学全集）の解題によると福地の明治初期の動向について次のような記述がある。

明治になって、桜痴も旧幕府の人材の一人だというので政府に徴されたが、病と称して就かず、一時静岡に移った。然し静岡にも留まっていられず、間もなく出京して浅草に寓居をトし、夢の舎主人（遊女の家市五郎とも）と仮号して浮世を茶にした生活を始め、戯作翻訳で生計をたてた。仮名垣魯文、山々亭有人などは当時の交遊仲間だ。花柳の遊びは益々盛んだったが、それでも幾分冥加を考えたものかを考えたものか、湯島に日新舎（後に他人の経営となって共慣義塾と改める）という英仏語学教授の学校を起した。一時は福地の名で繁昌したが、然し先生の桜痴が吉原へばかり流連しているので長くはつづかず、生徒が憤慨して学校の財産を叩き売りにして引き上げるという奇観を演じたという。…

この文章においても、福地の「日新舎」と「共慣義塾」の連続性を認めている一方、福地の放蕩ぶりに憤慨した生徒が財産を叩き売りしたという。

この共慣義塾については『岩手近代教育史 第一巻』によれば「日新舎」とは全く関係なく明治三年に設立され、湯島天神下に移転してくるのが明治5年11月のことであり、多少違っている。

共慣義塾については『岩手県教育史資料第二集（学制篇）』においても検討がなされている。この中では共慣義塾に在籍していた原敬を取り扱った書『原敬伝』上巻¹⁴抄を引用している。

14) 前田蓮山

共慣義塾は、原敬が入学当時は京橋区木挽町三丁目にあった。犬養毅も明治八年に上京して、この塾に入ったが「犬養毅伝」¹⁵⁾に「この共慣義塾は、本郷湯島にあった。初め福地源一郎の設立に係り、それが如何なる経路を経たものか、後に八戸藩主南部氏の所有に移り……」とあるのは間違いで、宗家の南部氏が創立したのである。また諸書に「共勸義塾」と書いてあるのも間違いである。この塾は、原敬が入塾後間もなく新富町に塾舎を新築して移転したが、明治五年四月に類焼の厄に遭い、丸焼けになったので、本郷湯島の福地源一郎の塾（日新舎）跡に移った。福地は、明治三年十一月から伊藤博文に従って米国に行き、更に岩倉大使の随行員になったけれども、誰か福地の名義で塾を続けていたが、とうとう維持しきれなくなつて共慣義塾に譲渡したのである。

この文章に登場する『犬養毅伝』と前述の『犬養木堂伝』は別の書物であるが、共慣義塾に関する事項はほぼ同様の内容である。共慣義塾新富町塾舎の火事が明治五年四月の事項で、その前後に原敬は退塾したようである。

福地源一郎の「日新舎」の塾舎跡に「共慣義塾」が移転するのが、明治5年11月であり、約八カ月の空白がある。

2) 共慣義塾設立の初期段階

『岩手近代教育史 第一巻』によれば、共慣義塾が設立に向けて東京府に願書が提出されたのは、明治4年12月のことである。この時は「東京府下、木挽町五丁目」に位置していた…その翌明治5年1月に「共慣義塾出張所」が「東京府下、浅草区新吉原京町一丁目三十番地」に設立されている。…

そしてこの年の2月には以前に木挽町にあった共慣義塾が「東京府下、新富町二丁目二十番地」に移転するものの、この新築した塾舎が2か月程度の明治5年4月に火事で焼失してしまった。…

そこで、新たな学舎を探すことになるが、それが、以前福地源一郎が「日新舎」を開設していた跡地であった。明治3年に学校経営を断念した福地源一郎は「渋沢栄一の推薦により、大蔵少輔伊藤博文に紹介され、明治新政府の下級官僚として同省御用掛に任官された」…

一方、日新舎で教頭をしていた中江兆民は明治4年にフランスへ留学している。

以上のことから、福地の「日新舎」と「共慣義塾」の両者は存在した時期が違い、湯島天神下の学舎を使用したことから、連続性を唱える説があるものの、厳密には「共慣義塾」の新富町学舎の火事によってやむをえず湯島へ移転したのが事実のようである。

明治5年4月に火事で焼失してから、11月に湯島天神下に移転するまでの間は「共慣義塾」はその出張所である吉原にあったことが想像される。

犬養毅の『犬養木堂伝』によれば、犬養が共慣義塾に入塾した当時の明治八年時の状況は次の通りである。

当時、東京では、福沢諭吉の慶応義塾、中村敬宇の同人社、林欽次の勸学塾、尺振八の共立学舎などが有名であった。然るに木堂が藤田（藤田茂吉）の勧めに従って共慣義塾を選んだのは、一つ学費の関係からであった。此塾は、月謝も賄料も他に比して安かったために、学費の乏しい苦学生は多く此処で学んだ。従って塾舎は粗造不潔で、寄宿舎の賄なども甚だ粗末なものであった。（中略）此処で、木堂は英語の初歩を学んだ。…

この記述によれば、共慣義塾の新富町の学舎が火事で焼失したため、財務状況が悪化してい

たことを物語っている。この後、犬養毅は慶応義塾へ入学することになる。

「米内光政とその時代〈7〉」¹⁶⁾において盛岡藩子弟の登竜門として「共慣義塾」を取り上げている。

鶴崎(熊吉)の『犬養伝』は「共慣義塾」について「福地源一郎の設立に係り、それがいかなる経路に経たものか八戸藩南部氏の所有に移り」としている。

八戸藩(青森県八戸市)南部氏は岩手南部氏の分家。九代藩主信順は薩摩藩からの婿養子であった。

『犬養伝』の誤った記述から混同し、鹿児島と岩手との関係が語られるようになったのであろうか。鶴崎の『犬養伝』の次のくだりが唯一関連をにおわせる。

薩摩の子弟が多く学んでいたが、十年の役(一八七七年)が起きると大部分鹿児島に帰り、大抵戦死を遂げた(中略)

同塾は(一八)八三年(明治十六年)九月廃校。鹿児島県と八戸市の教育史ともに同塾の記述はない。…

鶴崎熊吉氏の『犬養毅伝』と明治百年史叢書の『犬養木堂伝』は基礎となる資料はおそらく同じであろう。

薩摩藩出身の塾生が多数いたことは確かなことのようにであるが、犬養の入塾理由は学資不足で、「都下第一の貧乏学校たる湯島の共慣義塾に入れり。」とある。…

これはおそらく、新富町新塾舎が開設わずか2か月で火事に遭遇したことと少なからず関係があると思われる。薩摩藩出身者達も、学資不足ながら郷土の先輩の後に続けとばかり東京に大挙上がってきたと解釈するのが妥当と思われる。

3) 共慣義塾出張所について

共慣義塾の出張所が吉原に設置されたことについては、前掲『岩手近代教育史第一巻』に詳しい。明治5(1872)年1月に提出された願書は次の通りである。

一、塾名 共慣義塾出張所「日浩舎」

一、位置 東京府下、浅草区新吉原京町一丁目三十番地

明治五年、共慣義塾出張所「日浩舎」

開校ノ記

東京府内ハ四方輻輳ノ地ニシテ、開化モ諸国ニ先立チテ進ム事速カナリ。独り吉原ノ一廓ノミ遊里ノ陋習ニ伝染シ、文明ノ今日ニ至ル迄、懶惰僥倖ヲ以テ活計ヲ求ムルガ故ニ昼夜小利ニ奔走シ、從学ヲ得ル者稀ナリ。余、宿縁アリテ此浮境ニ寄留スル事十有余年、常ニ廓習ノ固陋ニシテ里人ノ蠢愚ナルヲ嘆ズレドモ、家毎ニ之ヲ説クベカラズ。説ント欲スルモ才学ニツナガラ乏シク、徒然トシテ黙止スル歳アリ。方今文物ノ隆時ニ当リ、西洋ノ理学盛大ニ行ワルヨリ、市街ニ官校・私塾ノ開興数多ナルヲ以テ、其驥尾ニ附キ、□ニ倣イ、吉原ノ廓中ニ小学私塾ヲ営ミ、他ヨリ教官ヲ請ジテ多年ノ蒙昧ヲ覚サシメ、僅ニ報國ノ微志ヲ表セント欲シ、義ヲ知己ニ告グ。云々。

一、設立者 東京府下、吉原中の町 沼田美佐雄

一、科目 正科 英学。副科 漢籍。

一、生徒 二十二名(内、女二名)

一、教師の一人 岩手県土族 花田円申二十一歳(英学、洋学担当)…

16) 「朝日新聞岩手版」1997.6.11

前頁の資料によれば、共慣義塾出張所の名前は「日浩舎」で、設立者は「東京府下、吉原中の町沼田美佐雄」となっている。この学塾に南部氏が直接関係していたか否かの判断はできないが、吉原に出張所を設立されたことは確かなことのようにである。

共慣義塾出張所の存在について『岩手近代教育史』からの見解を述べたが、この学塾は意外な書物に登場している。

それは明治開化期の風俗を戯作調に描いた仮名垣魯文の『安愚楽鍋』（小林智賀平校注岩波文庫）である。

この中で「花柳巷日洗私塾の同社中（しんよしはらにっせんしじゅくのどうしゃちう）」という語句の補注として次のような記述がある。

この「日洗」という名は維新風俗を伝える縁り深いものである。御一新に際し遊女制度の禁止を法律化することになり、明治二年四月東京府令で市中に高札を立て、「東京町中端々に至るまで、遊女の類、隠し置くべからず、若し違反の輩あらば、其処の年寄五人組、地主まで曲事たるべきもの也」というお布令が出た。そこで全国の遊女に足を洗わせ真面目な職業に転ぜしめるため、吉原では明治三年沼口清吉が廓内に「日洗社」という私塾を設けて、遊女の職業補導を試みたという説もあるが、それは少し疑わしい点もあり、おそらく次の事実の誤報であろう。つまり仲の町の沼口美佐雄が京町一丁目に「共慣義塾」という塾を明治五年二月に設けて、遊女に英・漢を教授したとの記録はたしかにある。いずれにせよ魯文は直接これは関係しなかったようだが、とにかくこの「日洗社」なり、「共慣義塾」にちなんで、「北門日洗私塾」とやったものであろう。…

上の記述では吉原で開設された学塾の名前は「日洗社」であり、それを開いたのが、沼口美佐雄であり、沼口清吉ではないと述べている。この事項に関連して、『明治六年一月開学明細書第四番中学区』（東京府）に沼口清吉が開設した「日洗舎」の開学明細の記述がある。私学明細書では、

第五大区小十二区新吉原京町一丁目三十番借地居住

東京府下管下商

校主 沼口清吉 申四十三才

明治五年申二月開業

校名 日洗舎

位置 新吉原京町一丁目三十番地

学科 英学

教員 英学 京都府貫属土族 市川周光 申二十一才 …

この記述の中でとくに注目すべきは「日洗舎」の存在位置である。住所の「新吉原京町一丁目三十番」というのは、本論文で述べた共慣義塾出張所「日浩舎」の住所と全く同じである。おそらく両者は同一の学塾であると思われる。「日洗」の「洗」の字と「日浩」の「浩」の字が類似していることから、共慣義塾の出張所の名前が「日洗舎」であると考えられる。

設立者について『岩手近代教育史』では、「沼田美佐雄」とあるが、『安愚楽鍋』の校注では「沼口美佐雄」とある。そして『明治六年一月 開学明細書』では「沼口清吉」である。沼口美佐雄と沼口清吉との関係については同一人物である可能性や親類兄弟である可能性がある。いずれにしても、共慣義塾の出張所は明治六年の時点において「新吉原京町一丁目三十番」に存在しており、子女に英学教育を施していたことは間違いがないようである。

『安愚楽鍋』の中の「花柳巷日洗私塾の同社中 青陽山人 仮名垣魯文伏稟」という語句の校注に注目し、「日洗舎」と「共慣義塾」との関連について考えてみた。仮名垣が「日洗私塾の同

社中」と表記したのは、彼の「戯作」という形の創作のようにも受け取られるが、次の記事と突き合わせると必ずしもデッチ上げとは考えられない。

『安愚楽鍋第三輯』に「于時明治第五年壬申ノ孟春吉旦、東京浅草金龍山下ノ旅店、駿州屋ノ小坊ニ於テ、陸中国水澤ノ藪医 臥牛散人 小野涼亭記之」という序文がある。

種痘ハ天下ノ仁術、肉食ハ万民ノ滋養ナリ。故ユエニ、牧牛ノ國家ニ益アル、豈他獸ト等シカランヤ。

方今開化稍ク進ミ、市井ノ細民ト雖モ、牛痘牛肉ノ世ニ功アルヲ知ルモノカラ、従ッテ医治ヲ全フシ…衆庶健康ノ體ヲ保ツニ至ル。此頃魯ガ著述ノ小説、安愚楽鍋、三輯ノ稿ヲ披瀝シテ…小道トイエドモ見ルベキモノアリ。…モッテ感読ヲ謝スルト爾云。

仮名垣魯文は第一輯のはじめに「福澤の著た肉食ノ説でも読ませて」と書き牛肉の功を述べているが、ここに小野涼亭を引き合いに牛痘の功を描いたのである。

小野涼亭とはどういう人物でどうして魯文は知り得たのであろうか。

小野涼亭と種痘については、山口興典氏「水沢の種痘について—特に小野涼亭の種痘術を中心にして—」¹⁷⁾ という論稿がある。

水沢留守家医家小野家は小野良策、涼亭父子の種痘実施によって一躍有名になる。

父良策は高野長英の養父玄斎の門人であった。シーボルト事件連座を恐れて久留米、赤間関、三田尻、広島に逃れ尾道に移っていた高野長英を訪ね、母美也からの手紙を渡し帰郷を促したと言われる。長英と深い関係がある洋学者であった。涼亭はその前年に生まれている。蕃社の獄後逃亡した長英が江戸に戻り自殺するが、その翌年の嘉永四年にはじめて良策は種痘を実施した。涼亭は安政四年江戸の伊藤玄朴、大槻俊齊、箕作阮甫など80余人の洋学者が謀って神田お玉ヶ池に種痘館を建てた時、上京して医学研究をした。涼亭は文久元年帰郷して種痘を中心にした医療活動を行う。(なお、涼亭は江戸滞在中と考えられるが、キリスト教の洗礼を受けた。)種痘館はその後焼却したので下谷和泉橋通りに新築したが、文久元年には西洋医学所と改称し幕府の直営とした。初代の頭取は大槻俊斎であった。

大坂では緒方洪庵が精力的に種痘の普及に努め大坂除痘館で活躍するが、大槻俊斎が病没した文久2年4月には後任として江戸によばれた。大坂除痘館は明治3年に官立大阪医学校付属病院の種痘館に発展する。

東京では、明治3年新政府が太政官布告をもって種痘を奨励すると共に種痘館を新たに設置した。4年にはこれを大学東校の種痘局に発展させた。一方開化期の啓蒙主義の中で種痘思想は普及していく。例えば、日本におけるジェンナー像の形成に重要な役割をも演じた¹⁸⁾中村敬宇の『西国立志編』は明治4年以後刊行がはじまるし、藤田茂吉の「種痘の説」(『民間雑誌九』)は明治8年2月発表される。

こうした中ですでに幕末以来千人以上の種痘を実施し、有名な涼亭が上京して医術などを施したという情報をキャッチしての『安愚楽鍋』の記事であった。機を見るに敏なる魯文であった。(なお、第二輯の下に「今朝米沢町の日新堂から届いた新聞」という記事があるが、この日新堂は『日新真事誌』という新聞に関係する。)

この仮名垣魯文は前述の如く福地源一郎と交流があったことから、「日洗舎」と「日新舎」との関連は考えられる。福地源一郎は大の肉食好きであったということで、『安愚楽鍋』にも登場している。

17) 『岩手史学研究65』 昭56

18) 佐藤忠雄著『権利としての教育』 P.24 筑摩書房 1968

（或牛店へはいったところが）古臭くなった老牛を食はせられたので替りに手を付ねへで、かんどやうをして飛出したが、実に牛肉ばかりは、日増はまつぴらサ。しかし福地先生なんぞは、古臭いのが可（いい）と、いはっしやるが、素人口じゃア、屠て二日目あたりが最上だ子。…

仮名垣魯文と福地源一郎との関係については、先掲『安愚楽鍋』の注において「福地は魯文・黙阿弥などと共に浅草馬道寝釈迦堂のいろは長屋に住んでいたから、魯文とは親交があった」とある。また、福地は吉原通いをしていたことなどを考えれば、「日洗舎」の存在を知っていたと考えられるが、福地源一郎は「日新舎」を追い出された後、渋沢栄一の推薦で官吏となるため、日洗舎に直接関係があったとは考えにくい。

さて、共慣義塾にもどり、いま一つの点を付け加えておきたい。

前掲の長岡高人論文にも福沢諭吉の慶応義塾、中村正直の同人社とならび共慣義塾は「三大義塾」とされている。しかし、『明治7年外国語学校統計表』によれば、

慶応義塾の526名、攻玉塾（近藤真琴）351名、同人社男235名女18名の上位三校に比して共慣義塾は75名の13位である。とても「三大義塾」などとは言えない状況であったといえよう。

以上で、本紀要に「北方洋学思想史」という題名で連載してきたものは筆者定年のためこれで止める事とする。

なお、本稿の共慣義塾に関するある部分の基本調査では平成10年度本学大学院修了生那須弘明君の手を煩わせた事を記し感謝申し上げます。